

[課題演習報告]

高等学校英語スピーキングテストに関する実践研究 —生徒・教師にとって実用性のあるテスト開発を目指して—

横 山 笛 美

Fuemi YOKOYAMA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻スクールリーダーシップ開発コース
教科教育リーダープログラム
福岡県立京都高等学校

(2024 年 1 月 10 日受理)

高等学校の英語教育では、4 技能 5 領域の複数の領域を統合させた言語活動の更なる充実が求められている。特に「話すこと」に関しては、実践から評価に至るまで、各学校が創意工夫を凝らし取り組んでいる。本研究では「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」におけるスピーキングテストを作成・実施・評価し、生徒・教師にとって、どのようなスピーキングテストが望ましいものであるかを明らかにする。新課程の高校 1 年生を対象に 2 年間「話すこと」に特化した授業実践やスピーキングテストを計 9 回実施・検証した。テスト開発においては、特に実用性を重視し、生徒の「英語を使って何ができるようになるか」、教師の「テストの作成・実施・採点・結果の解釈が容易かどうか」に着目した。その結果、スピーキングテストは ICT を活用した音声録音方式よりも、実際のコミュニケーションの場面に近い対面による口頭試問方式が、より有効であることが示唆された。

キーワード：スピーキングテスト、音声録音方式、口頭試問方式、実用性、動機づけ

1 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

2022 年 8 月文部科学省は「英語教育・日本人の対外発信力の改善に向けて」と題された「アクションプラン」を公表した。その中で、各種の英語資格・検定試験において、日本の平均スコアは諸外国の中で最下位であること、また、スピーキングに関してはアジア 29 カ国中、最も低く、日本人の英語力や対外発信力には課題があることが明らかとなった。また、日本人留学生の減少や、海外で働きたいと思わない「内向き志向」を示す新入社員が多いことも示された。高等学校の英語教育の現場では、コミュニケーションを重視した授業改善が進められているが、取組の状況には、地域差や学校差が大きく、ICT や ALT の活用、パフォーマンステストの実施等を含む改善が求められている¹⁾。

また、文科省(2018)は学習指導要領改訂の理由の一つに「特に『話すこと』及び『書くこと』などの言語活動が適切に行われていないこと、『やり取り』や『即興性』を意識した言語活動が十分ではないこと、読んだことについて意見を述べ合うなど複数の領域を結び付けた言語活動が適切に行われていないといった課題がある」²⁾ ことを挙げている。4 技能 5 領域の総合的な英語力の向上と、「話すこと」及び「書くこと」を中心とした更なる発信力の強化を図る取組が求められている。

2023 年 7 月文科省は、全国学力・学習状況調査の結果を発表した。これは中学 3 年生を対象としたものであるが、「話すこと」の全国平均正答率は 12.4% で 4 年前の前回と比べても、18.4 ポイント下回ったことが明らかとなった。また、「話すこと」は全 5 問あり、一つも答えられない無回答が 6 割を超えたことも報告された。このように、英語で「話すこと」には課題があり、高等学校では、児童生徒の現状を踏まえ、早急な対応が必要である。

(2) 在籍校の実態から

在籍校である福岡県立京都高等学校（以下「本校」と略記）は生徒の大多数が国公立大学への進学を目指す地域を代表する進学校である。スクールミッションに「地域のみならず世界を舞台に活躍する人材（グローバルリーダーとなり得る人材）を育成する」を掲げ、第3学年の重点目標には「国公立大学100名以上、九州大学以上の難関大学・難関学部10名以上の合格を目指す」とある。

2022年7月に本校1年生を対象に実施したグローバル意識調査では「将来、海外留学や海外で仕事をしたいと思いますか」という質問に対し、生徒の79.2%が「いいえ」と答えている。前述の「アクションプラン」で示された全国調査と同じく「内向き志向」を示す傾向が強い。

近年の入試変動の一つに、文科省(2021)は、2025年1月以降の大学入学共通テストでの「話すこと」を含む4技能統合型の英語民間試験の導入を断念した。これにより「話すこと」が共通テストに課されることはなくなった。しかし、大学側が英語民間試験の結果を出願資格に求め、また得点換算や加点などの優遇措置を講じる傾向は増え続けている。そのため、本校生徒の進路実現の幅を広げる、またスクールミッションである「グローバルリーダーの育成」という観点からも、スピーキングテストを学校全体の取組として組織的・計画的に実施することは、生徒の多様な英語力を把握・分析・改善することにおいて大変意義深い。

2 研究主題・副題の意味

(1) 「高等学校英語スピーキングテスト」とは

福岡県の高等学校におけるスピーキングテストを含むパフォーマンステストの実施状況は、いまだ50%にも満たない（英語教育改善プラン, 2022）。高等学校における英語スピーキングテストを組織的・計画的に実施し、学習評価を充実させることは、生徒の学習や教師による指導の改善に生きるものとなる。

(2) 「実践研究」とは

この研究は、教育目的、教育内容、指導法、評価法など、実際の教育場面で何をどのように実施すればよいのかという意味決定の行為に関わる実践（広田, 2009）である。

(3) 「生徒・教師にとって実用性」とは

テスト開発に必要な「妥当性」、「信頼性」に加えて、本研究では、特に生徒・教師にとっての「実用性」に着目する。生徒にとって「実用性」とは、

「英語を使って何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）である。また教師にとって「実用性」とは、テストの作成・実施・採点・結果の解釈が容易であるかどうか（根岸, 2017）を意味する。

(4) 「テスト開発」とは

本校生徒・教師の実態に沿ったスピーキングテストを組織的・計画的に作成・実施・評価するためのテスト開発を目指す。

3 研究の目的

スピーキングテストの作成・実施・評価に至るまでの実践を示し、生徒・教師にとって、どのようなスピーキングテストが望ましいものであるかを明らかにする。また「話すこと」は、生徒の情意と深く関連し、生徒がストレスや不安を感じることなく、スピーキングテストが英語学習への動機づけとなるテスト開発を目指す。

4 研究の仮説

スピーキングテストが「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」を測るための形成的評価として機能すれば、生徒は自己の学習を内省・調整し、教師は授業改善に取り組むようになるであろう。また、総括的評価としても、観点別評価の「主体的に学習に取り組む態度」を含め、学習評価をより充実させることができるであろう。

5 仮説解明のための具体的方策

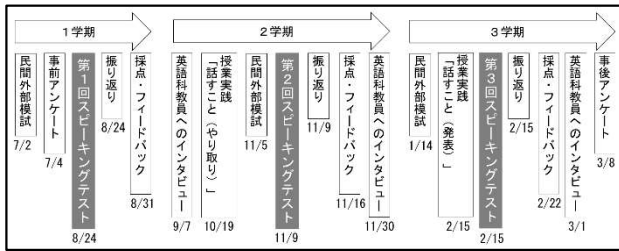
(1) 生徒へのアプローチ

- ① 生徒の意識調査アンケート
 - ② 民間試験を利用したスピーキングテスト
（ICTを活用した音声録音方式）
 - ③ 本校オリジナルスピーキングテスト
（ICTを活用した音声録音方式）
 - ④ 本校オリジナルスピーキングテスト
（対面による口頭試問方式）
 - ⑤ 生徒の振り返りシート（内省・自己調整学習）
- ### (2) 英語科教員へのアプローチ
- ① 英語科教員へのインタビュー

図1に研究の1年目で使用したスピーキングテストの年間計画を示す。スピーキングテストを各学期に1度ずつ、計3回実施することにした。授業実践や練習等を含めると、スピーキングテスト

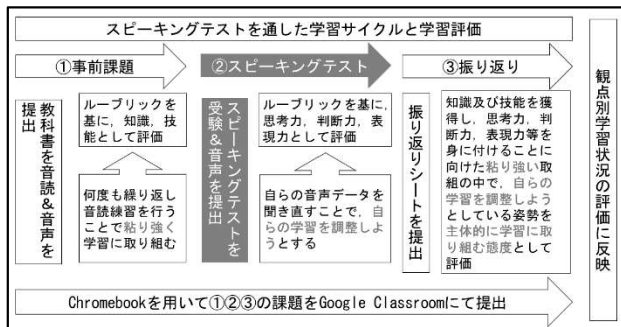
の実施は2年間で計9回に及ぶ。

図1 スピーキングテストを中心とした年間計画



また、図2はスピーキングテストを中心とした学習サイクルと学習評価を示す。この学習サイクルでは、生徒は事前課題として、教科書の英文を音読したものを録音して提出する。スピーキングテスト受験後に、自己の学習を内省・調整するための振り返りを行う。教師は学習評価として、事前課題から「知識・技能」を、スピーキングテストでは「思考・判断・表現」を、振り返りからは「主体的に学習に取り組む態度」を見取ることができる。

図2 学習サイクルと学習評価



このように、スピーキングテストを中心とした言語活動は、観点別学習状況の評価として機能する。学習指導要領に示す目標に照らして、その実現状況がどのようなものであるかを、観点ごとに評価し、生徒の学習状況を分析的に捉えることができる。またスピーキングテストを通じた学習サイクルでは「主体的に学習に取り組む態度」の観点である「粘り強さ」や「自己調整学習」を喚起することが可能である。

6 研究の実際

(1) 生徒へのアプローチ

① 生徒の意識調査アンケート

対象：令和4年度入学1年生6クラス（240名）

実施期間：令和4年7月～令和5年11月

表1は、生徒の意識調査アンケートの質問項目である。スピーキングテスト実施前後の生徒の意識変容を調査した。この間にスピーキングテスト

は、授業実践や練習等を含めて計9回実施している。

表1 生徒の意識調査アンケート 質問項目

1. 4技能5領域の「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」、「書くこと」の中で、一番好きな領域はどれですか。
2. 4技能5領域の「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」、「書くこと」の中で、一番伸ばしたい領域はどれですか。
3. 2の回答に対する理由はなぜですか。
4. あなたはなぜ英語を学習するのですか。あなたの考えに近いものを一つ選択してください。 ○英語を話す人々やその文化が好きだから。 ○英語を話す人々の一員として自分も参加したい。 ○英語ができたらいい成績がとれる。 ○就職に有利である。 ○大学入試で必要だから。 ○世界と関わることをしたい。 ○世界の人々とコミュニケーションしたい。
5. 英語を聞いたり話したり、読んだり書いたりするときに不安が高まることはありますか。「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」、「書くこと」のどの領域に対して一番不安を感じやすいですか。
6. その不安は以下の三つの中でどれに近いですか。 ○コミュニケーション不安 ○テスト不安 ○否定的評価に対する不安

表2は、質問2に対する結果である。「話すこと [やり取り]」の興味・関心が34.7%から60.4%の25.7ポイント上昇している。スピーキングテストで問われる内容が「やり取り」や「即興性」を意識した言語活動としてうまく機能していると推測される。

表2 生徒の意識調査アンケート結果（興味・関心）

「一番伸ばしたい領域はどれですか」	令和4年7月 (n=147)	令和5年7月 (n=159)
「聞くこと」	38.8%	19.5%
「読むこと」	10.9%	10.7%
「話すこと [やり取り]」	34.7%	60.4% ↑
「話すこと [発表]」	5.4%	4.4%
「書くこと」	10.2%	5.0%

表3は、質問4に対する結果である。「内発的動機づけ」から英語を学ぶ生徒が増加し、また「国際的志向性」も高まっている。

表3 生徒の意識調査アンケート結果（動機づけ）

「なぜ英語を学習するのですか」	令和4年7月 (n=147)	令和5年7月 (n=159)
英語を話す人々やその文化が好きだから。（内発的動機づけ）	6.8%	9.4% ↑
英語を話す人々の一員として自分も参加したい。（内発的動機づけ）	8.8%	9.4% ↑

英語ができればいい成績がとれる。(外発的動機づけ)	12.2%	15.1%
就職に有利である。(外発的動機づけ)	7.5%	4.4%
大学入試で必要だから。(外発的動機づけ)	36.7%	34.0%
世界と関わることをしたい。(国際的志向性)	3.4%	3.1%
世界の人々とコミュニケーションしたい。(国際的志向性)	17.7%	24.5%↑

スピーキングテストによって「英語の学習に成功しやすい」(佐藤, 2021)といわれる「内発的動機づけ」や、「英語学習に影響がある」(Yashima, 2002)といわれる「国際的志向性」を向上させることができていると分析する。

②民間試験を利用したスピーキングテスト

(ICTを活用した音声録音方式)

対象：令和4年度入学1年生6クラス(240名)

実施期間：令和4年7月～令和5年7月

テスト内容：民間試験(ベネッセ総合学力テスト 英語SP学校採点キット5分10点満点・ループリックを含む)

表4 スピーキングテストの問題構成

パート	問題数	解答時間	詳細	評価段階(得点)
A: 日常のやり取り	2	10秒	問1では生徒自身に関する質問 問2ではイラストに関する質問に答える。	4点 [やり取り]
B: 読んで伝える	1	30秒	聞き手を意識して、スクリプトを音読する。	2点 [発表]
C: 図や表について説明する	1	30秒	図や表の内容について、論理的に説明する。	4点 [発表]

本研究における2年間は、民間試験を使用または参考にしたが実施し、問題構成とループリックは、比較検証できるように、すべて同一のものを使用した。表4に示す問題構成は「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」を統合させた言語活動を含み、バランスが良い。またループリックもシンプルで機能的である。

民間試験を用いて実施した理由は、本校にとってスピーキングテストを学年の取組として、組織的・計画的に実施することは初めての試みであったからである。

また、手立てとしては、生徒が発話する機会を

増やすために、そしてストレスや不安を感じないように、テスト前には十分なウォームアップとしての言語活動を行った。例えば、「話すこと[やり取り]」に関しては、使用する語句や文、対話の展開などを示し、ペアによるインフォメーション・ギャップ等の活動を多く取り入れた。また、「話すこと[発表]」では、聞き手に分かりやすく、音声や論理性に注意して話して伝えるための練習をICTやALTを活用して取り組んだ。

そして、民間試験の過年度問題を練習問題として利用し、50分の授業の中で、練習と本番の2回のテストを実施することにした。

テスト全体の流れは、教師が問題冊子を配布し、問いの音声をクラス全体に一斉に流す。生徒は自らのスマートフォン等で自身の解答を録音する。そして、その音声データを「Google Classroom」に提出する。その後、教師はループリックを基に採点し、生徒一人一人にコメントを付けてフィードバックをする。ループリックによる採点基準は、事前に生徒・教師で共有しているものとする。

表5は、研究の1年目に実施したスピーキングテストの学年平均と音声データの提出率を示す。

表5 令和4年度1年生スピーキングテストの結果

	第1回 8月 (n=215)	第2回 11月 (n=233)	第3回 1月 (n=234)
学年平均(点)	4.74点	5.63点	5.69点
提出率(%)	70.7%	88.4%	84.2%

ア 成果

令和4年1年生を対象に民間試験を利用したスピーキングテスト(8月)と外部模試(「話すこと」以外)の偏差値(7月)を用いて、統計分析ソフトHADにより、相関分析を行った。その結果、有意な正の相関が見られた($r(215)=.383, p<.001^{**}$)。また、スピーキングテストの結果を説明変数、外部模試の偏差値を目的変数として、回帰分析を行った結果、スピーキングテストは外部模試の偏差値を優位に予測していた($R^2=.15, b=1.63, SE=0.35, t(215)=6.07, p=.000^{**}$)。このことから、スピーキングテストを通して、技能統合型の言語活動に取り組むことは、他技能への波及効果をもたらすものといえる。

実際に、外部模試(1年生11月)において「思考・判断・表現力」を測るための「書くこと」の問いで、学年全体の得点率が全国平均よりも8.6%上回っていた。複数の領域を結び付けた言語活動を充実させた波及効果の現れだと考えられる。

また、1年次の生徒の自宅学習記録からは、学

年全体の英語学習時間が1766時間（4月～7月）から1920時間（10月～1月）と154時間増加し、英語を主体的に学ぼうとする行動の変容を確認できる。

そして何よりも、生徒が提出した音声データからは、つまずきながらも何とか英語で表現しようとする姿勢が確認できた。これは「主体的に学習に取り組む態度」の観点である「粘り強さ」として見取ることができる。

イ 課題

テスト前のウォームアップとしての言語活動や、ICTの使用説明が不十分であったためか、英語やICTを苦手とする生徒にとっては、ストレスや不安を感じる場面があったかもしれない。泉(2006)は「英語学習や話すことへの動機や不安、自信、コミュニケーションへの意志（willingness to communicate）といった情意面と、外向性・内向性といった性格や言語適正、習熟度の違いなどから、苦手な生徒にとっては、情意フィルターが上がり、パフォーマンス力を下げる場合がある」³⁾と指摘する。スピーキングテストの実施には、英語やICTを苦手とする生徒を意識した十分な対策と配慮が求められる。

また教師にとって、提出された音声データを採点、評価することは、大変な作業であった。1クラスの採点に掛かる時間は5分×40名のおよそ200分である。そして生徒一人一人にコメントを付けてフィードバックを行ったため、より一層の時間と労力を必要とした。

加えて、生徒個人のICT（携帯電話等）を利用して実施したため、また、ICT運用能力の差があることから、音声データの提出率が100%にならなかった。そのため形成的評価としてはうまく機能したが、研究の1年目は総括的評価には至らなかった。

③本校オリジナルスピーキングテスト

（ICTを活用した音声録音方式）

対象：令和5年度2年生6クラス（234名）

実施期間：令和5年7月5日（水）

テスト構成：民間試験と同様（5分10点）

テストの内容：本校英語科教員と協働して、より生徒の日々の生活に関わる話題を考案

比較検証できるように問題構成とループリックは、研究の1年目と同様に民間試験のものを起用した。

表6に、令和5年7月に2年生を対象に実施した民間試験を利用したスピーキングテストと本校オリジナルスピーキングテストの学年平均を示す。

表6 2種類のスピーキングテストの学年平均の比較

テスト種別ごとの平均点	2年生7月 (n=234)
民間試験を利用したスピーキングテスト ICTを活用した音声録音方式（点）	6.20点
本校オリジナルスピーキングテスト ICTを活用した音声録音方式（点）	5.15点

ア 成果

テスト実施後の生徒の振り返りシートにおいて「民間試験を利用したスピーキングテストと本校オリジナルスピーキングテストでは、どちらが取り組みやすいですか」という調査を行った。それにより「本校オリジナルスピーキングがよい」また「どちらでもよい」を含めて、生徒の半数以上54.1%から、本校オリジナルスピーキングテストでもよいという結果を得ることができた。

図3 本校オリジナルテストで使ったPart Cの問題



本校オリジナルスピーキングテストでは、図3のように「Part C：図や表について説明する」において、留学生に英語で30秒間、ポスターについて説明することが求められる。生徒の振り返りシートからは「馴染みのあるイベント（体育祭）だったので説明しやすかった」（原文ママ）等の意見が多く挙がった。本校オリジナルスピーキングテストでは、より生徒の日々の生活に関わる話題を提供できたものと考察する。「話すこと[発表]」を問う「Part C：図や表について説明する」に関しても、事前の練習等を含め、段階的に取り組むことで、ストレスや不安を軽減でき、発表できたものと分析する。

研究の2年目である令和5年度にはGIGAスクール構想により、生徒一人一人にChromebookが配布され、ICTの活用が大きく前進した。加えて、ICTを苦手とする生徒を考慮し、Chromebookの使い方を動画配信する等の手立てを講じることで、課題となっていた音声データの提出率は100%に達した。それにより、形成的評価だけでなく、総括的評価としてもスピーキングテストを活用し、観点別評価をより充実させることが可能になった。

イ 課題

学年平均を比較すると、本校オリジナルスピーキングテストの方が、民間試験を利用したスピーキングテストよりも、1.05ポイント低くなった(表6)。その原因は本校オリジナルスピーキングテスト「Part A: 日常のやり取り」の正答率の低さにある。この問いは、日常の学校生活を想定し、留学生から質問を受けた際の状況がイラストで示され、その質問に即興に10秒間で答えるものである。以下に使用した音声スクリプトと模範解答を示す。

音声スクリプト

(問題) 留学生

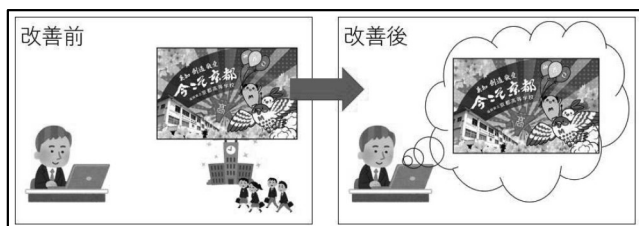
I checked your high school homepage on the Internet. I found that your school has mascots. How many are there in your school?

(模範解答) 生徒

There are three (mascots in my school).

本来であれば「話すこと」における正答率の低さは、「聞くこと」の力不足に起因していると考えられる。しかしながら、生徒の多くが誤答として、“There are about 700 students in my school.” 等のように、学校の全生徒数を答えていた。これは、作成したイラストに改善の余地があると推測する。図4に示すように、イラストは余分な情報を含まず、シンプルなものの方が良い。また、テスト開発においては、問題はコミュニケーションを行う目的や場面、状況を効果的に設定することが重要であるということが示唆された。

図4 イラストの改善前と改善後



④本校オリジナルスピーキングテスト

(対面による口頭試問方式)

対象：令和5年度2年生6クラス(234名)

実施期間：令和5年11月1日(水)

テスト構成：民間試験と同様(5分10点)

テストの内容：本校英語科教員と協働して、より生徒の日々の生活に関わる話題を考案

比較検証できるように問題構成とループリックは、研究の1年目と同様に民間試験のものを起用した。

ALT 3名(他校から2名のALT派遣を含む)、本校

英語科教員5名(教科担当)が試験官となり、一対一の面接形式で行う口頭試問方式とした。

資料1 口頭試問方式によるスピーキングテストの様子



ア 成果

学年全体の平均は8.20点で、1年次より実施してきた音声録音方式と比較すると、少なくとも2.0ポイント以上は高くなっている。その理由は、生徒が質問をうまく聞き取れない場合に、“Could you repeat that again?” や “I beg your pardon.” 等を用いながら、その場で聞き直すことで、会話を継続できたことが要因の一つである。それにより、音声録音方式のときに起こっていた無回答を大幅に減少させることができた。これは生徒の振り返りシートからも「聞き取れなくても、もう一度聞ける」(原文ママ)等の意見が多くあり、口頭試問方式によるスピーキングテストの実用性の高さを実証できるものである。

表7 生徒の振り返りシート結果(取組やすさ)

「どのスピーキングテストが取り組みやすいですか」	2年生11月 (n=160)
民間試験を利用したスピーキングテスト(ICTを活用した音声録音方式)	6.3%
本校オリジナルスピーキングテスト(ICTを活用した音声録音方式)	10.6%
本校オリジナルスピーキングテスト(対面による口頭試問方式)	68.1%
どちらでもよい	5.6%
どちらでもない	9.4%

表7は、2023年11月に実施した生徒の振り返りシートにおける「どのスピーキングテストが取り組みやすいですか」という質問に対する結果である。本校オリジナルスピーキングテスト(対面による口頭試問方式)を支持する生徒が68.1%となった。その理由として「人と交流できているし、相手の表情を見ることができ、話していて楽しい」

(原文ママ)等の意見が多く挙がった。これは、生徒にとっての「実用性」である「英語を使って何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)から「英語を使って楽しく安心して会話を継続できる」ことにより、対面による口頭試問方式

が、より望ましいものであると解釈する。

生徒の意識調査アンケート(表1の質問5・6)により、多くの生徒が「話すこと[やり取り]」に対して「コミュニケーション不安」を示していることが明らかとなった。そのため、今回の対面による口頭試問方式では、生徒のストレスや不安を軽減するために、事前指導から実施に至るまで次の4つの手立てを行った。

(ア) 事前にテスト全体の流れを動画配信

英語科教員が面接官を、ALTが生徒役を演じ、問題の流れや模範解答を動画で示した。その際、やり取りをうまく継続できない場合に聞き直すためのフレーズを含める。

(イ) 生徒が事前に準備・練習が可能な問題設定

「Part A: 日常のやり取り」において、生徒が事前に準備・練習が可能な自己紹介を行い、それに関する質問を一つ受けるというやり取りをする。

(ウ) 生徒が自ら選択可能な問題設定

「Part B: 読んで伝える」において、「英語コミュニケーションⅡ」の教科書Lesson1～10の要約(100 words 程度)から、生徒は一つ選び、音読する。自らの好みやレベルを選択できる。

(エ) 生徒の日々の生活に関わる話題

「Part C: 図や表について説明する」において、本校の学校パンフレットを用いて、4月～3月までの学校行事を紹介する。生徒はその場で試験官より指定された月のイベントについて30秒間、英語で発表する。

これら4つの手立てにより、生徒の振り返りシートには「事前に準備ができて何か言うことができる」(原文ママ)等の記述が多く見られた。生徒は、事前に準備・練習する、また自らの学習を選択する機会を与えられることで、ストレスや不安を払拭し、また、自己の学習を調整することができる。教師はその機会を意図的に仕掛けるで、生徒の学習意欲を向上させる動機づけを促すことができる。

教師の採点に関しては、事前に話し合い、ルーブリックで評価の観点と基準を共有した。「Google スプレッドシート」を用いることで、他の採点者の様子もタイムリーに確認できるため、採点者間信頼性にも配慮することができた。

イ 課題

ALTからは「『Part A: 日常のやり取り』において、生徒が自己紹介で延々と話し続ける傾向があり、タイマー等で時間を制限する必要がある」と助言があった。また、別のALTからは「『Part B: 読んで伝える』において、音読後にその内容に関

する問いがあれば、読解にもつながる」との意見があり、統合的な言語活動の充実という観点からも今後の課題としたい。

また、対面による口頭試問方式では、ALTを他校より派遣要請する際、外部の人的資源の活用の在り方も検討すべき課題である。

⑤ 生徒の振り返りシート(内省・自己調整学習)

それぞれのスピーキングテスト後に、生徒の振り返りの状況を把握するための調査(記述式)を実施している。主な質問項目は、内省を問うための「今回のスピーキングテストを受けて、自らの学習を振り返り、気付いたことや感じたことを書いてください」と、自己調整学習を問うための「次のスピーキングテストまでに、どのような学習が、自分には必要だと思いますか」である。

表8 生徒の振り返りシートからの特徴的な語

内省		自己調整学習	
難しい	.169	単語	.197
話す	.141	必要	.115
考える	.082	覚える	.109
言う	.079	練習	.091
答える	.072	語彙	.090
自分	.063	文法	.089
出る	.059	リスニング	.080
分かる	.058	聞く	.071
即興	.057	力	.068
出来る	.052	読む	.059

数値はJaccardの類似性測度

表8は、研究の1年目の3回分の振り返りシートをまとめて、計量分析ソフトKH Coderを用いて、Jaccardの類似性速度で分析した結果を示す。内省においては、「難しい」「話す」「考える」が、自己調整学習においては、「単語」「必要」「覚える」が上位三つに示された。多くの生徒が英語で話したり、考えたりすることは難しいと内省しながらも、単語を覚える必要があると自己の学習を調整していることが明らかになった。これは、Swain (1995) が提唱する「アウトプットの役割としては、①気づき機能(アウトプットによって自分が言えないことに気づく)、②仮説検証機能(相手の反応を見て、自分の使った表現が正しかったかどうか確認する)、③メタ言語機能(自分の言語使用を振り返り、言語知識を整理する)がある」⁴⁾ という理論に一致している。アウトプットとして「話すこと」を中心とした言語活動に取り組むことで、生徒は自らの学習を振り返り、学習を調整するという波及効果が現れていると解釈できる。

また、表9は「スピーキングテストの返却時に送られる教師からのフィードバック(コメント)

は役に立ちましたか」という質問に対する結果である。

表9 生徒の振り返りシート結果（フィードバック）

「フィードバックは役に立ちましたか」	令和5年7月 (n=159)	令和5年11月 (n=160)
とてもそう思う。	38.4%	40.0%
そう思う。	58.5%	50.6%
あまりそう思わない。	2.5%	7.5%
まったくそう思わない。	0.6%	1.9%

およそ9割の生徒が教師からのフィードバックに対して肯定的な姿勢を示し、教師の労力負担は考慮すべき課題であるが、生徒はそれを動機づけや自己調整学習のためのよい機会と捉えていると判断できる。

(2) 英語科教員へのアプローチ

①英語科教員インタビュー

「音声録音方式による採点は大変だが、生徒がどこでつまづいているのかを判断でき、授業改善につながっている」との意見があった。実際に「論理・表現Ⅱ」では、授業の冒頭にALTとのティーム・ティーチングによる「話すこと」の言語活動を毎時間導入するという授業改善がみられた。また2年生3学期には、スピーチコンテストを企画し、学年の取組として、4技能5領域の統合的な言語活動を更に充実させようとしている。

そして「対面による口頭試問方式では、特に英語を苦手とする生徒たちが楽しそうに英語で話している様子が印象的だった」とあるように、生徒が楽しく安心して会話を継続できることにより、肯定的な動機づけを高めている可能性がある。

本校では対面による口頭試問方式の方が、より持続可能な取組としてスピーキングテストを実施することができるという結論に至った。

7 全体考察

スピーキングテストにおいて、ICTを活用した音声録音方式よりも、実際のコミュニケーションの場面に近い対面による口頭試問方式の方が、生徒・教師にとって実用性のあるテストとして、より有効であると結論づける。生徒たちの振り返りシートには「無機質なものに向かって話すより、誰かと会話するほうが楽しいし、喋れる」(原文ママ)等があり、ICTでは満たされないコミュニケーションへの欲求に、口頭試問方式では生徒の評価が高かった。つまり、生徒の「英語を使って何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)

を伸長し、その機会を増やすことを可能にする。そして教師にとっても、口頭試問方式の方が、採点の労力が大幅に軽減できるというメリットがあり、また対面により生徒の変容が目に見えて明らかであることから、テストの採点・結果の解釈に関して、より容易であると結論付ける。

8 成果と課題

(1) 成果

○本校オリジナルスピーキングテスト（対面による口頭試問方式）が、生徒・教師にとって、実用性が高く、手立て等により生徒のストレスや不安を軽減することも可能であることから、より有効であり、学習の動機づけにもつながった。

○スピーキングテスト（計9回）や外部模試の結果を個人成績票として一覧にし、形成的評価として生徒に還元した。また総括的评价としても「主体的に学習に取り組む態度」を含む観点別評価をより充実させることができた。

(2) 課題

○テスト開発においては、更なる実践と経験が必要である。また、ALTを派遣要請する等の外部の人的資源の活用の在り方は検討すべき課題である。

○音声録音方式は、音声データを保存・蓄積できることから、今後は、eポートフォリオとしての活用が期待できる。

主な引用・参考文献

- 1) 文部科学省(2022)「英語教育・日本人の対外発信力の改善に向けて(アクションプラン)」
- 2) 文部科学省(2018)『高等学校学習指導要領(平成30年告示) 外国語編 英語』6
- 3) 泉恵美子 門田修平『英語スピーキング指導ハンドブック』大修館書店 2006 8
- 4) 深澤清治 猫田和明『教師教育講座 第16巻 中等英語教育』共同出版 2014 77
- 中谷素之 岡田涼 犬塚美輪『子どもと大人の主体的・自律的な学びを支える実践—教師・指導者のための自己調整学習』2021 福村出版株式会社
- 根岸雅史『テストが導く英語教育改革:「無責任なテスト」への処方箋』2017 三省堂

謝辞

本研究にあたり、研修機会を与えていただき、ご支援いただいた福岡県教育委員会に心より感謝申し上げます。また、在籍校の校長先生をはじめ、諸先生方に多大なるご協力をいただきましたことを深く感謝申し上げ、謝辞といたします。